

# バンテアイ・クデイ遺跡の復元研究

## クメール建築・改造痕跡・形態変遷・当初の形式

### Relative chronology on Architectural modifications of the Banteay Kdei Temple

2001年9月

荒樋久雄

#### I はじめに

今までのクメール建築史研究において建造物の復元を取り上げた研究は、<sup>1</sup>管見する限り、決して多いものではない<sup>2</sup>。1. 本研究で取り上げたバンテアイ・クデイ遺跡に関する既存研究は見られるものの、建造過程の全容を解明するまでには至っていない<sup>3</sup>。そこで本研究では、同遺跡の復元の再考を試み、増拓・拡張年代、形態の変遷の解明にあたる一方、クメール建築における復元研究の方法論を提示するものである。

#### 建物の分割

同遺跡の建造時期を示す碑文などは今までに発見されていない。しかし、平面形態や用いられている装飾は、バイヨン様式に属し、ジャヤヴァルマン 世(1181~1218年?)の治世下に建てられた寺院であったと考えられる。

クメール建築の伽藍<sup>4</sup>構成は後期のもの程、複雑となり、建物同士が回廊などにより結合された形態をとる。バイヨン様式に属す同遺跡も回廊、諸建物が複雑に結合する。しかしながら、これらの建物間の結合部を注視すると、積み上げられた石材の縦目地がある面を境として、真っ直ぐ縦に通る箇所や、壁面、妻面などの彫刻を削り取り、建物を接続した痕跡など、建物の建造期の違いを示す様な痕跡が見られる。まずは、これらの痕跡を元に、複合的に構成された伽藍構成の分割を試みた。

#### 建築変更・改造痕跡の考察

同遺跡の石材の表面には、増拓など改造による痕跡。天井、扉、間仕切り、仏壇、<sup>5</sup>天蓋などの内部<sup>しつら</sup>設えの取り付け跡や木造屋根の桁穴跡など木造の部材が取り付けいていた痕跡。漆喰<sup>しつくい</sup>や彩色な

<sup>1</sup> [管の穴から見る意] (1) 見識がせまいこと。(2) 自分の知識・意見をへりくだってという語。「によれば」

<sup>2</sup> 代表的なものとして Henri MAUGER, Le Phnom Bayan, BEFEO36,1937 や Jacques DUMARCAÿ, Le Bayon, Mem. Arche de l'EFEO, 1967

<sup>3</sup> Philippe STERN, LES MONUMENTS KHMERES DU STYLE BAYON ET JAYAVARAMAN VII, PUBLICATIONS DU GUIMET, p.267, 1965 や片桐正夫 / 重枝豊 / 神宮太「ジャヤバルマン7世時代におけるクメール宗教建築の造営手法に関する研究」(カンボジアの文化復興第13号)上智大学アジア文化研究所など。P.STERNの業績は誰もが認めるところであるが、カンボジアに足を運んだのは、その研究人生の中で一度しかなく、研究は専ら写真によるもので、詳細に関する考証に欠けるとされる。

<sup>4</sup> [梵 samgharama (僧伽藍摩)の略。僧園・衆園・精舎と訳す] 寺の建物。特に大きな寺院。僧伽藍。

<sup>5</sup> 仏具の一。仏像などの上方にかざしたり、つったりする絹張りの笠。

ど建物の外内観を覆っていた建築材料や石材に直接彫られた浮き彫りなどにみられる痕跡など、大まかに分けて、3つの主だった痕跡がみられる<sup>6</sup>。

### 各種装飾・様式の考察

P.STERN はバイヨン様式をさらに整理し、三期区分している<sup>7</sup>。本研究では改造痕跡の時代的相関関係、STERN が考察した彫刻モチーフの研究成果など考慮し、各種装飾を年代判定の資料として整理、時代的に古い順にA、B、Cと序列化した。

#### - 1 マグザ<sup>8</sup>石(linteaux)

A type : 花綱と火炎紋様が融合したスタイル。

B type : 花綱、火炎紋様の代わりにS字懸垂唐草紋様が施される。また上部火炎紋様が面全体の上半を占める。

#### - 2 デパーダ<sup>9</sup>の(Dvadas)

A type : 仏龕<sup>ぶつがん</sup><sup>10</sup>は火灯型。髪飾りはアンコール・ワット様式を継承した、もしくは髪を結び上げただけのもの。腰布は後で裾をひらく。装身具は少ない。右手は体の前。

B type : 火炎状の仏龕をあしらい、突起状の髪飾りが林立(5本)。腰布の裾は後ろに描写されない。装身具は多い。右手は垂れ下がり、花などを持つ場合も多い。

#### - 3 仏龕(Arcatures)

A type : 高さに比して幅が狭く、曲線部の曲がり強く、上部の尖りもきつい。

B type : 横広で、曲線にくびれが少なく、かつ、仕事も粗い。

#### - 4 開口部枠装飾(Tableaux de porte)

A type : 円紋様の中心にパルメット<sup>11</sup>系草文もしくは人物像があしらわれる。1つの装飾単位は下記の2タイプよりも小さく、4ないし5つの円紋様が並立して彫られる。

B type : 中央に人物が印を結びその周囲をS字型懸垂文が円形に縁取られる。方立<sup>ほうだて</sup><sup>12</sup>石の幅一杯に縁取られる。

C type : 一对の摩羯魚<sup>まかつぎよ</sup><sup>13</sup>を中心として円紋様で縁取られる。方立石の幅一杯に縁取られる。

#### - 5 偽窓(faussees fenetres)

A type : 蓮子<sup>れんじ</sup><sup>14</sup>格子が独立して設けられる。

<sup>6</sup> ここでは、紙面の都合上、全ての痕跡に関する復元検証を論じる訳にはいかないが、方法鋪に関しては、拙稿の既存研究を参照願いたい。

<sup>7</sup> 前掲2のSTERN著書。

<sup>8</sup> 門や窓・出入り口などの上に渡した水平材

<sup>9</sup> 女神

<sup>10</sup> 仏像などを安置する厨子。

<sup>11</sup> シュロの葉をかたどるとされる、先端が扇形に開いた文様。エジプト・アッシリアが起源とされる。日本では忍冬文(にんどうもん)と呼ぶことがある。

<sup>12</sup> [「方立」は当て字か] 円柱や柱のない壁などに建具を取り付けるために立てる縦長の角材。柱寄(はしらよせ)。方立柱。牛車の前後の入り口の左右にある柱。高欄の端に突き出ている反り木。

<sup>13</sup> インドのマカラ。シャチ

<sup>14</sup> 窓や戸に木や竹の棧を縦または横に細い間隔ではめこんだ格子。

B type : 連子格子が壁面の石材に彫り込まれる。

C type : 壁面に彫り込まれるが、上面3分の2程をブラインド装飾で隠す。

- 6 基壇繰り型(Moulures)

A type : 中央部が平滑で花文などがあしらわれる。

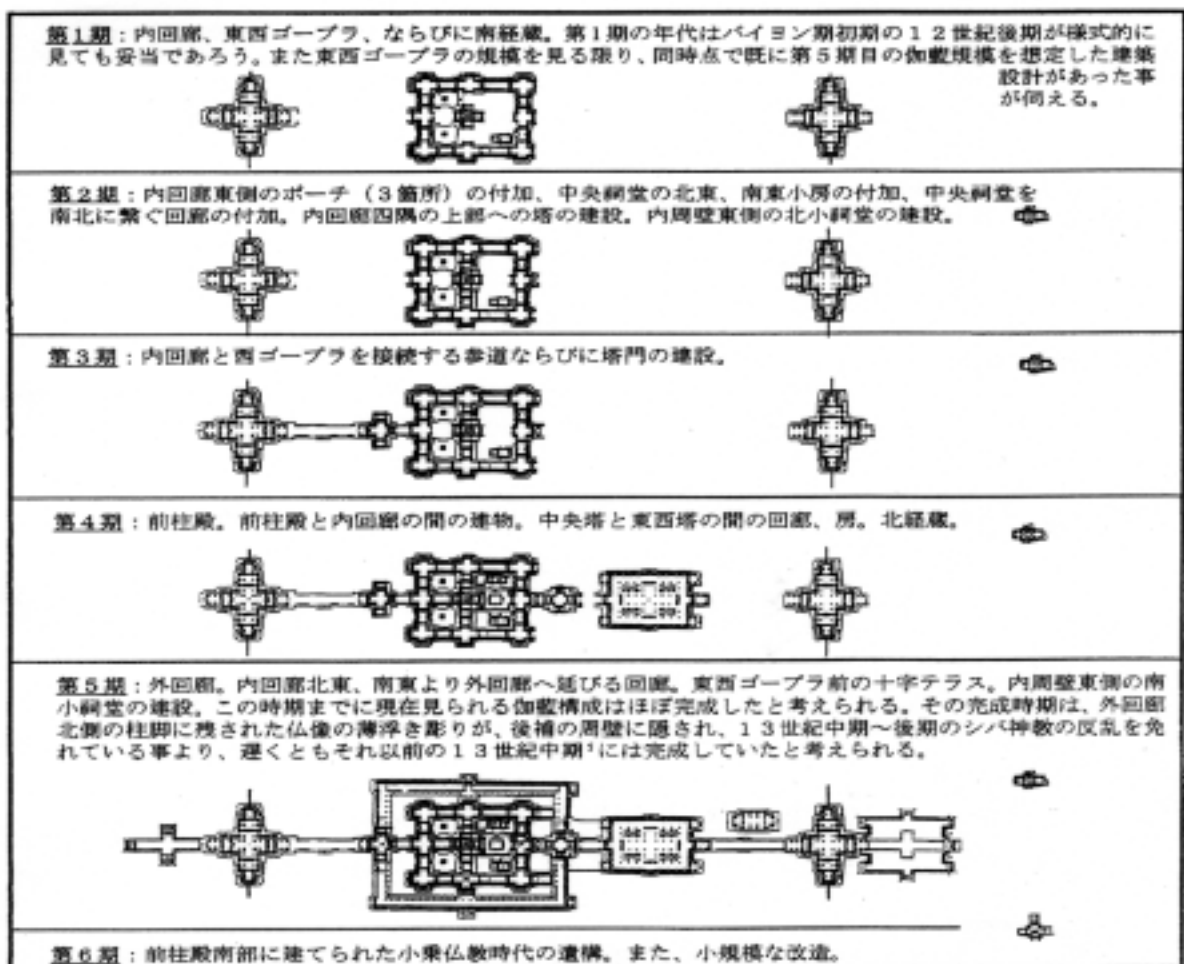
B type : 中央部が円弧でX型の紋様があしらわれる。

- 7 その他

その他の装飾として、柱頭、付柱<sup>15</sup>などに用いられる装飾。

### 建築変遷の過程

上記、建築変更、改造痕跡や各種装飾・様式の考察などより、バンテアイ・クデイの建造過程は、大略、6期に分ける事ができた。



16

<sup>15</sup> 付書院の外側の柱。書院柱。付書院 書院造りで、床の間わきの縁側に張り出して設けた出窓のような部分。文机ほどの高さの、板張りの前方に明かり障子をつけたもの。書院床。書院棚。明かり床。

<sup>16</sup> シバ神教の反乱が引き起こされた時期は、ジャヤヴァルマン八世（1243 - 1295）の治世であったとされている。

## まとめ

本研究では、改造痕跡、様式など建築的資料をもととして、数百にも及ぶであろう拡張、改造過程を大まかに6期に分けた。しかし、遺跡表面に見られる情報には限界がある。同遺跡では91年より発掘調査が行なわれ現在も継続中である。現在までのところバイヨン期以前の人的占有を示す様な確たる根拠は検出されていないが、バイヨン期以降のいわば小乗仏教時代の中世遺構が幾層かにわたり検出されている。今後は発掘調査結果などの新発見資料を加味した詳細な復原研究が求められる。

本稿は「バンテア・クデイ遺跡の復元研究」（日本建築学会学術講演梗概集（関東）2001年9月 荒樋久雄）をベースに加筆・修正したものである。